

(2) 予察情報－3 特殊報

令和元年 12 月 19 日

令和元年度 病害虫発生予察 特殊報 第 1 号

病害虫名： キュウリ黄化えそ病

病 原： メロン黄化えそウイルス

Melon yellow spot orthospovirus (MYSV)

対 象： キュウリ

1. 病害虫情報の内容

キュウリ黄化えそ病の発生を都内で初めて確認した。

2. 発生経過

- (1) 令和元年 11 月に東京都多摩地域の施設栽培キュウリにおいて、葉にえそ斑点を伴うモザイク症状や黄化などの症状を呈する株が確認された(図1～3)。
- (2) 発症株を対象として、当所で ELISA 法及び RT-PCR 法により検定を行った結果、メロン黄化えそウイルス(MYSV)が検出され、キュウリ黄化えそ病であることが確認された。
- (3) 本病は、平成8年に高知県で初めて確認されて以来、西日本を中心に 24 県で発生が確認されており、関東では都を除く全県で発生が確認されている。

3. 病徴

葉では、はじめ葉脈透過を生じ、症状が進展するとモザイク、えそ斑点、退緑斑点、黄化など様々な症状が現れる。一見すると要素欠乏による症状と類似している。症状が進むと生育が抑制されて収量が低下し、激しい場合には枯死する。果実では、まれに表面にモザイク斑を生じることがある。

4. 病原ウイルスの諸性質

- (1) 本ウイルスは、ミナミキイロアザミウマによって媒介される。他のアザミウマ類の媒介については不明である。ミナミキイロアザミウマは、幼虫時に本ウイルスに感染した植物を吸汁することで保毒し、死ぬまでウイルス伝搬能力を保持するが、経卵伝染はしない。また、種子伝染、土壌伝染はしない。汁液伝染力は低いため、管理作業で伝染する可能性は低い。
- (2) 本ウイルスは、自然感染ではウリ科メロン、スイカ、シロウリ、ニガウリが報告されている。接種試験ではウリ科(トウガン、カボチャ、ヘチマ)、ゴマ科(ゴマ)、ゴマノハグサ科(キンギョソウ、トレニア)、ツルナ科(ツルナ)、ナス科(ペチュニア)、ヒユ科(ホウレンソウ)及びユウガオ科(ユウガオ)で感染が確認されている。

5. 防除対策

- (1) アザミウマ類の防除を育苗時から徹底する。
- (2) 定植苗は、アザミウマ類の寄生やウイルス症状がないことを確認する。

- (3) 施設栽培においては、施設開口部に防虫ネット(0.4mm 目合以下又は赤色ネット等)の設置、近紫外線除去フィルムの利用によりアザミウマ類の施設内への侵入を防止する。
- (4) アザミウマ類の薬剤感受性の低下を防ぐため、系統の異なる薬剤によるローテーション散布を行う。また、青色粘着板を利用してアザミウマ類の早期発見に努める。
- (5) 雑草はアザミウマ類の生息場所となるので、ほ場内外の除草を徹底する。
- (6) 発病株は速やかに抜き取り、ビニール袋等に入れて密封し、完全に枯死させてから処分する。なお、芽かき処理等で取り除いた茎葉等も同様に処理する。
- (7) 栽培終了後は、全株を地際から切断または抜根し、施設を1~2週間程度密閉してアザミウマ類を死滅させる。



図1 全身に発病した株



図2 モザイク症状



図3 退緑、えそ斑点症状

令和元年度 病虫害発生予察 特殊報 第2号

病虫害名： ネギハモグリバエ別系統 *Liriomyza chinensis* Kato

対象： ネギ

1. 病虫害情報の内容

ネギハモグリバエ別系統の発生と被害を、東京都多摩地域のネギにおいて確認した。

2. 発生経過

- 令和元年8月に東京都多摩地域において、ネギの葉がハモグリバエ類により著しく摂食され、白化する症状が確認された(図1)。この被害状況は従来のネギハモグリバエと異なり、他県で発生が認められているネギハモグリバエ別系統に類似していたため、採取した幼虫を羽化させ、農業・食品技術総合研究機構 東北農業研究センターに遺伝子解析を依頼した。その結果、従来の系統(以下、A系統)とは異なる別系統(以下、B系統)と同定された。
- B系統の発生は、平成28年頃に京都府で確認され、以降、茨城県、富山県、千葉県、長野県、埼玉県、新潟県、栃木県、三重県、滋賀県、大阪府及び愛知県の2府10県で確認されている。

3. 形態

A系統とB系統の形態による識別は困難である。両系統とも成虫の体長は約2mm、胸部と腹部は黒く、その他の部分は淡黄色である(図2)。幼虫はうじ虫状で、成長すると体長約4mmに達し、蛹は体長約3mmの褐色、俵状である。

4. 生態

両系統とも成虫は葉の組織内に産卵し、孵化した幼虫は葉の内部に潜り込んで葉肉を食害する。幼虫は成長すると葉から脱出し、地表または土中で蛹になる。

5. 被害

B系統はA系統に比べて1葉あたりの幼虫数が多く、1葉に複数の幼虫が内部に潜り込んで集中的に葉肉を食害する。B系統の初期の食害痕は、A系統と同様、不規則な白線状であるが、進展すると近接した食害痕同士が癒合し、葉が白化したようになる(図3)。

6. 防除対策

- 両系統の形態での識別が困難なため、発生を認めたら、系統に関わらずネギハモグリバエまたはハモグリバエ類に適用のある薬剤により、発生初期の防除を徹底する。
- 被害葉及び収穫残さは本虫の発生源となるので、ほ場に放置せず、1か所にまとめて積み上げ、ビニール等で覆い、裾部分を土で埋める等適切に処分する。
- 不明な点があれば病虫害防除所や普及センターに連絡する。

7. 参考文献

特殊報：京都府、茨城県、富山県、千葉県、長野県、埼玉県、新潟県、栃木県、三重県、滋賀県、大阪府及び愛知県



図1 被害ほ場



図2 ネギハモグリバエ成虫



図3 白化した被害葉